

コロナ禍における 親の「孤育ち」実態および 子育て支援に対するニーズの変化

NPO法人 育ちあいサポートブーケ

監修 甲南女子大学 伊藤篤教授

2021年度ドコモ市民活動団体助成事業 実態調査報告会

2022年3月4日(金)

1. 団体紹介

【名称】NPO法人 育ちあいサポートブーケ

【設立】2014年3月(NPO法人格取得)

【所在地】兵庫県川西市

人口 約15.6万人 出生数 約850人

【事業内容】

2011年 4月 任意団体として子育て支援事業を開始

2014年 3月 NPO法人化

2019年 9月 法人独自の子育て支援拠点を開設

10月 川西市より子育て支援ルームの運営業務を受託

2020年11月 兵庫県知事より地域活動功労団体として「くすのき賞」受賞



【理念】

誰もが試行錯誤しながら
少しずつ親になっていく

その過程を

温かい眼差しで

おおらかに

ゆったりと見守り

大人 子ども 地域

みんなが

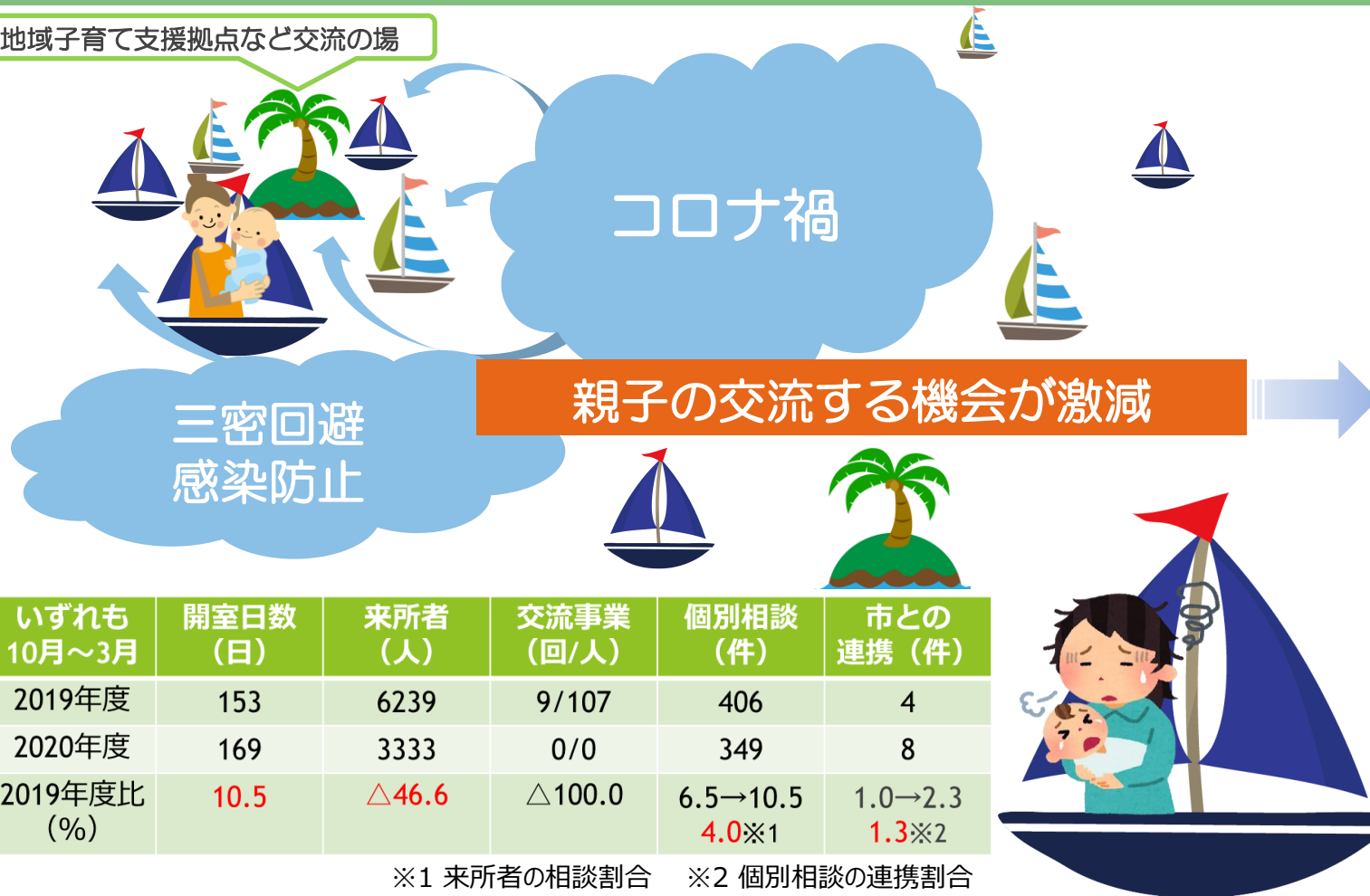
育ちあっていける

場や繋がりを提供する



2. 調査の背景と目的

地域子育て支援拠点など交流の場



仮説①

コロナ禍により人との交流が不活化し子育て家庭の孤立が加速度的に進行する

仮説②

親として育つための支えを得にくい環境で孤立感や子育ての困難が顕在化する

仮説③

親のニーズに寄り添う多様なアプローチの支援が必要になる

調査目的

①【保護者】の実態 ②【子育て支援施設】における事業の実態 ③【支援者】【訪問員】の視点

これら3つを明らかにすることにより、コロナ禍における子育て支援ニーズの変化を捉え、今後の子育て支援のあり方を考察・提起すること

3. 調査概要

(1) 調査地: 兵庫県全域(41市町)

(2) 調査対象 / 調査方法

【調査Ⅰ】 兵庫県在住の3歳未満の子どもを育てる保護者 / WEB調査

【調査Ⅱ】 地域子育て支援拠点、利用者支援事業所(基本型) / 紙面またはメール

【調査Ⅲ】 地域子育て支援拠点の職員、利用者支援事業所(基本型)の専門員
/ 紙面またはメール

【調査Ⅳ】 乳児家庭全戸訪問員 / 紙面またはメール

(3) 調査期間: 【調査Ⅰ】 2021年9月22日～11月30日

【調査Ⅱ～Ⅳ】 2021年9月1日～11月30日(一部延長)

(4) 調査依頼方法 / 回答数

【調査Ⅰ】 QRコードを掲載したチラシの配布(配架に許可を得られた官民の事業所・園所・イベントなど)

神戸新聞社子育てサイト「すきっぷ」、ひょうご子育てコミュニティによる告知、SNSでの告知 / **451名(有効447名)**

【調査Ⅱ～Ⅳ】 兵庫県こども政策課より41市町の調査対象事業の総括課へ協力依頼文書をメール送付した後、法人から重ねて調査協力を依頼した。 / 【調査Ⅱ】34市町145ヵ所、【調査Ⅲ】33市町293名、【調査Ⅳ】24市町42名

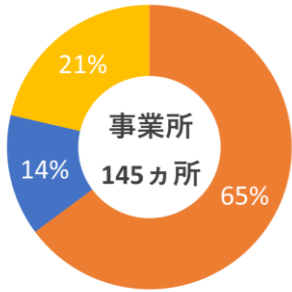
(5) 分析方法 得られたデータは「IBM SPSS Statistics (Ver.21)」および「js-STAR_XR(release 1.1.8j)」による解析を行い、自由記述の回答に関しては、類似の内容をカテゴリー化するという方法によって整理した。



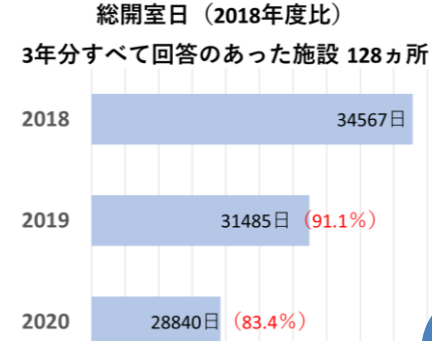
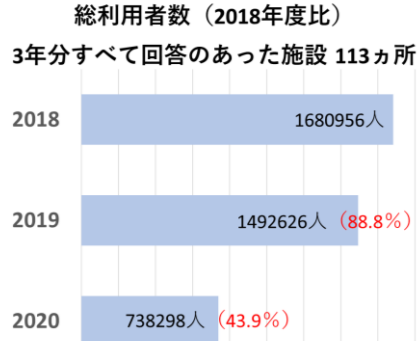
4. 調査Ⅱ

—地域子育て支援拠点事業所および利用者支援事業所(基本型) 34市町145カ所—

■地域子育て支援拠点 ■利用者支援事業所(基本型) ■複合施設

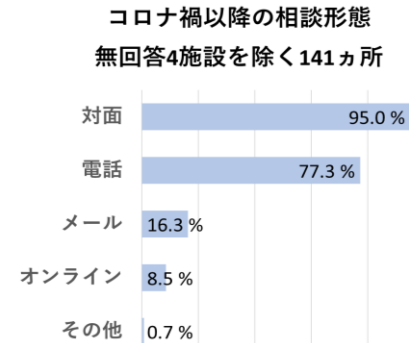
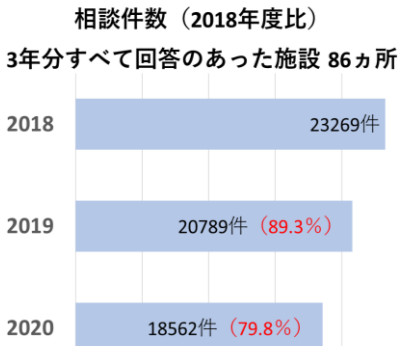
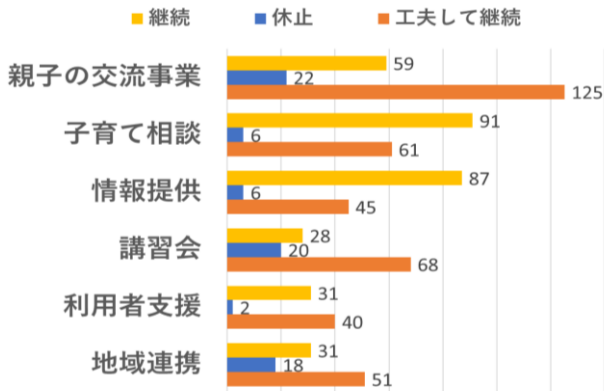


利用者は
コロナ禍前
に比べ
半数以下
に減少



コロナ禍に
おける
子育て支援

コロナ禍での事業実施状況(カ所)

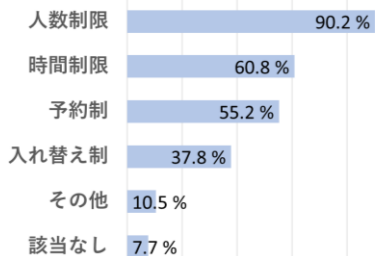


人数制限を始めとした感染対策を行いながら、工夫して交流事業を継続した事業所が多く見られた

対面事業に対するニーズと手ごたえを感じている

コロナ禍以降取り入れた施設の受け入れ態勢

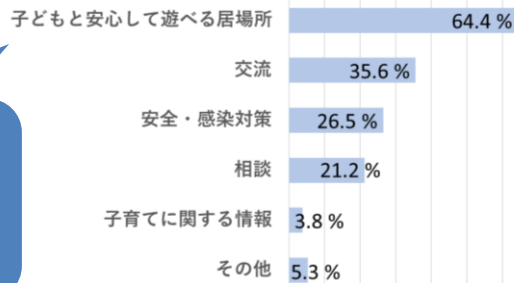
無回答2施設を除く143カ所



選択肢の減少で
コロナ禍前からの
ニーズが顕在化

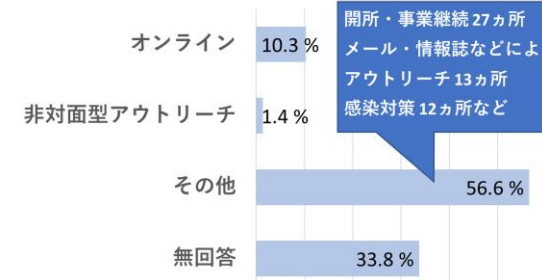
コロナ禍以降に事業所として最も必要とされていること

無回答13施設を除く132カ所



コロナ禍以降に行った支援提供の工夫で最も手ごたえを感じているもの

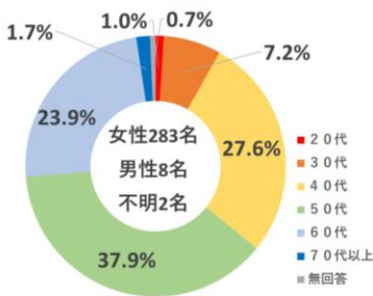
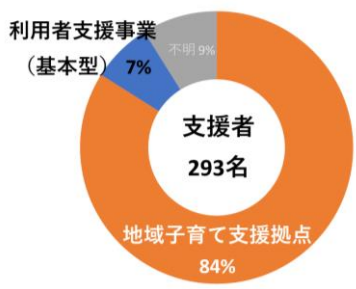
145カ所



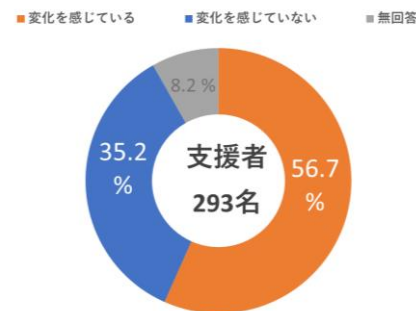
開所・事業継続 27カ所
メール・情報誌などによる
アウトリーチ 13カ所
感染対策 12カ所など

5. 調査Ⅲ

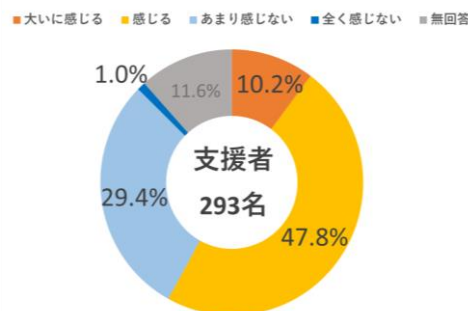
—地域子育て支援拠点職員・利用者支援事業(基本型)専門員33市町293名—



コロナ禍後の子育ての悩みや子育てに関する相談内容の変化



コロナ禍前と比べて子育て支援に対する親のニーズは変化していると感じるか



コロナ禍における
子育て支援

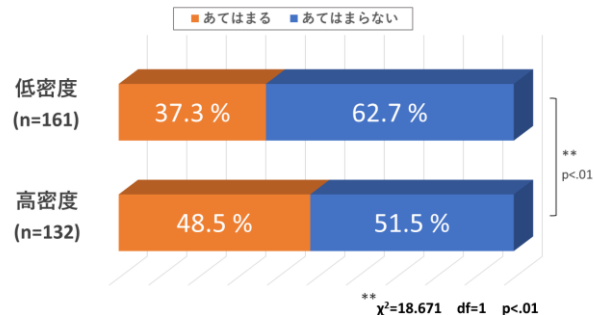
コロナ禍前と比べて変わったと感じている親の様子 支援者 293名



行動抑制による家庭内
ストレスの高まり

親同士の距離の
広がり

コロナ禍前と比べて変わったと感じている親の様子 「孤立している親が増えた」地域別クロス分析 支援者293名

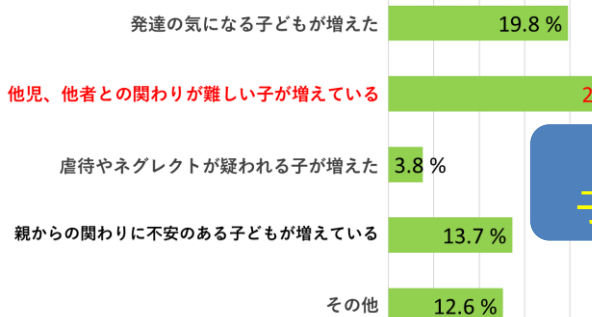


支援者のまなざし

親の情報取得
方法の変化

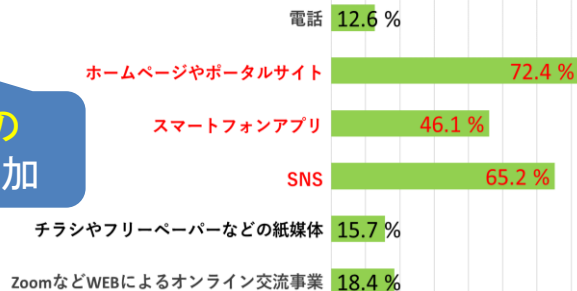
オンラインを活用した支援の
手応え

コロナ禍前と比べて変わったと感じている子どもの様子 支援者 293名

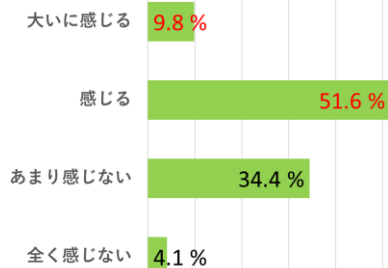


人見知りの
子どもの増加

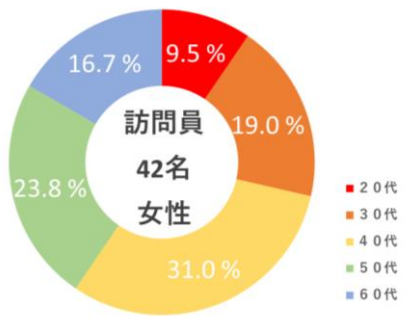
コロナ禍後に親の利用が進んだ子育て情報の取得方法 支援者 293名



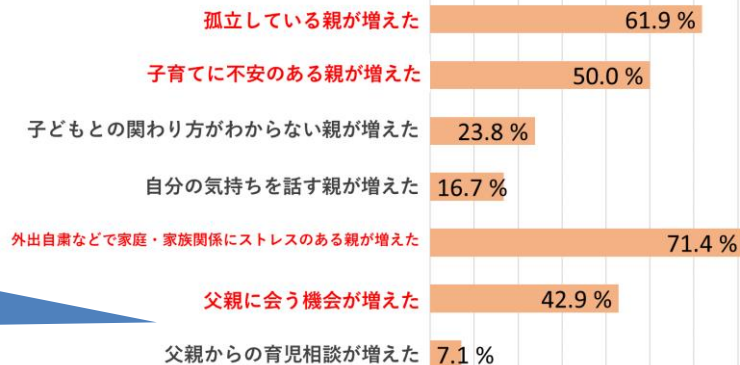
オンラインや電話での支援事業に手応えはあるか 122名の回答支援者の割合



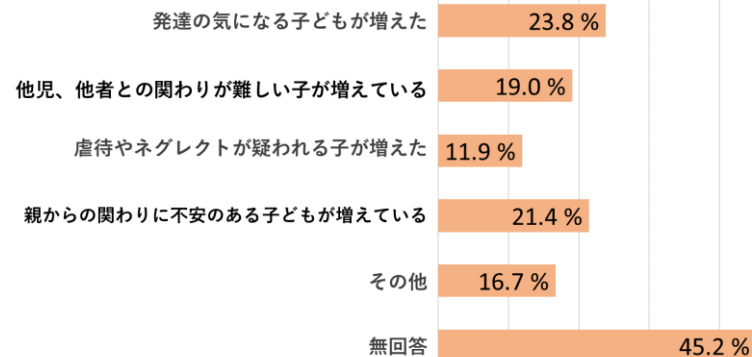
6. 調査Ⅳ 一乳児家庭全戸訪問事業 訪問員24市町42名



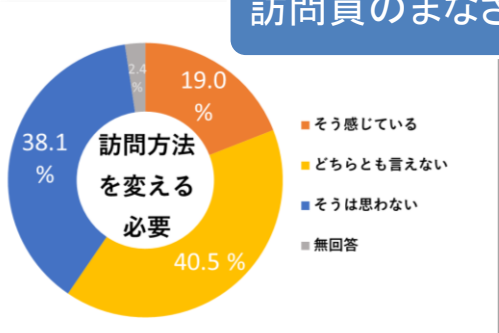
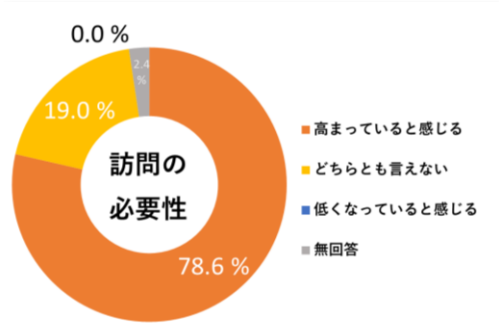
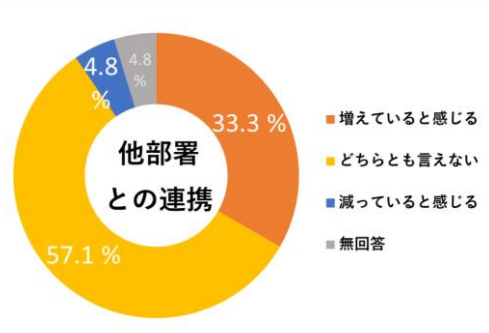
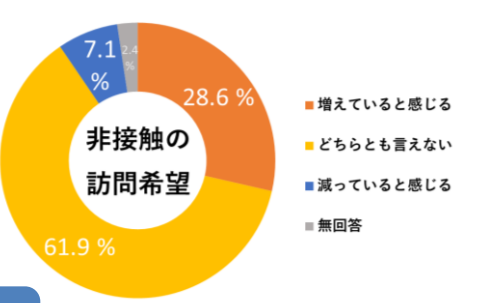
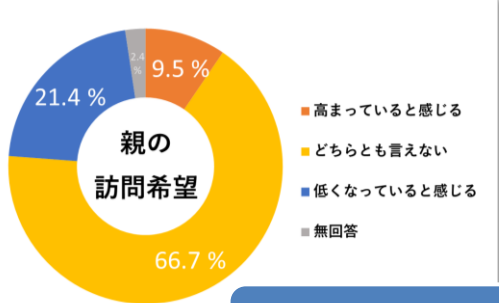
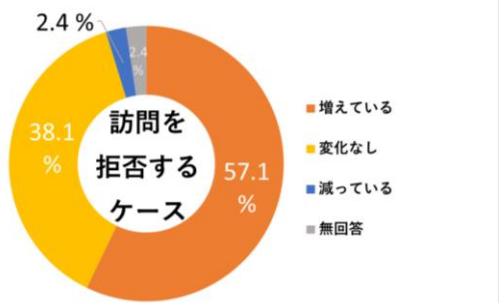
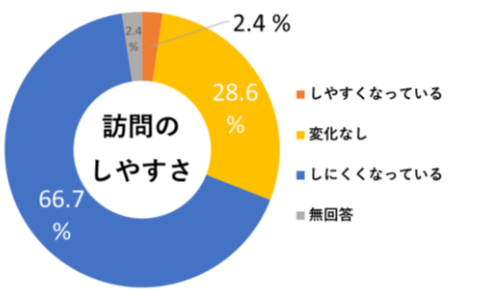
コロナ禍前と比べて変わったと感じている親の様子 訪問員 42名



コロナ禍前と比べて変わったと感じている子どもの様子 訪問員 42名



コロナ禍による父親に接する機会の創出

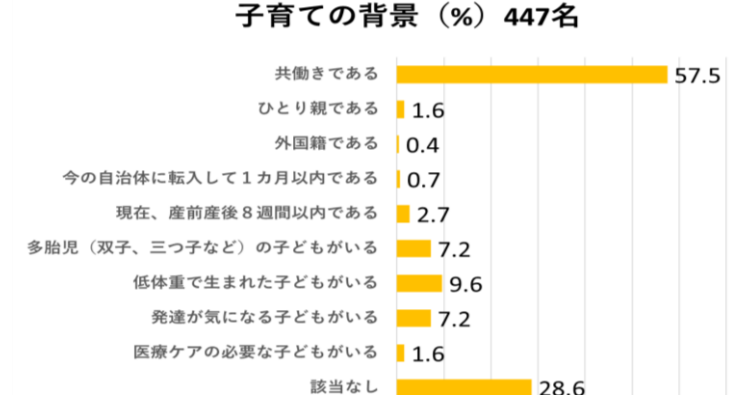
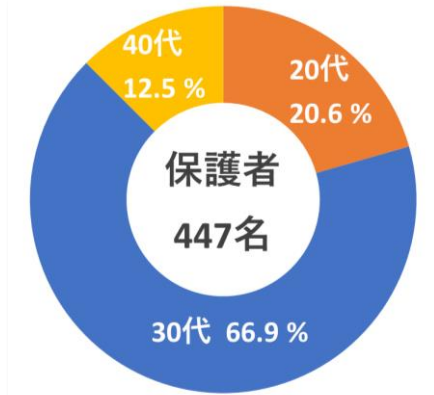
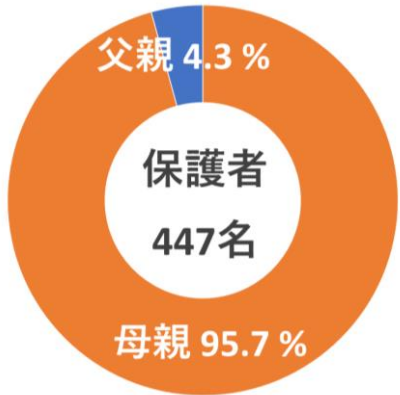


訪問員のまなざし

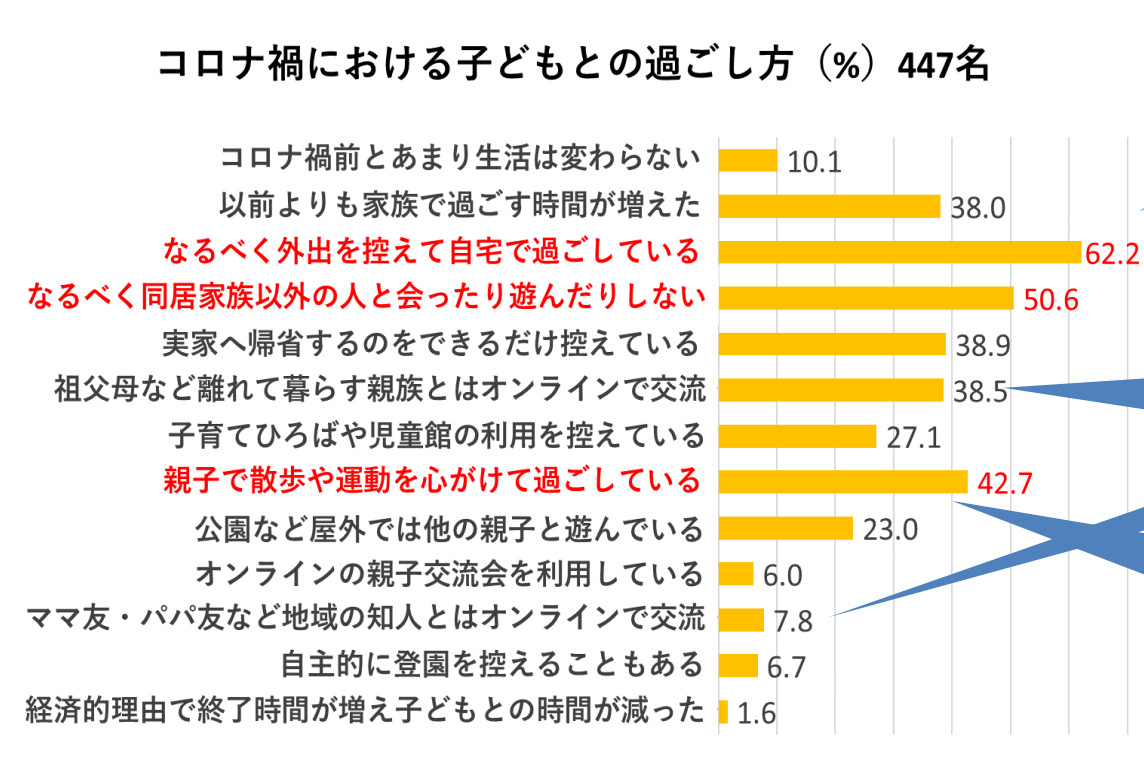
感染対策や非接触訪問の工夫の必要性
外出機会がなく孤立している母親への傾聴とストレス緩和の重要性

7. 調査 I

—兵庫県在住で3歳未満の子どもを育てる保護者 28市町447名—



コロナ禍に
おける
子育ての実態



外出を控え、同居家族以外と極力会わない生活をしている

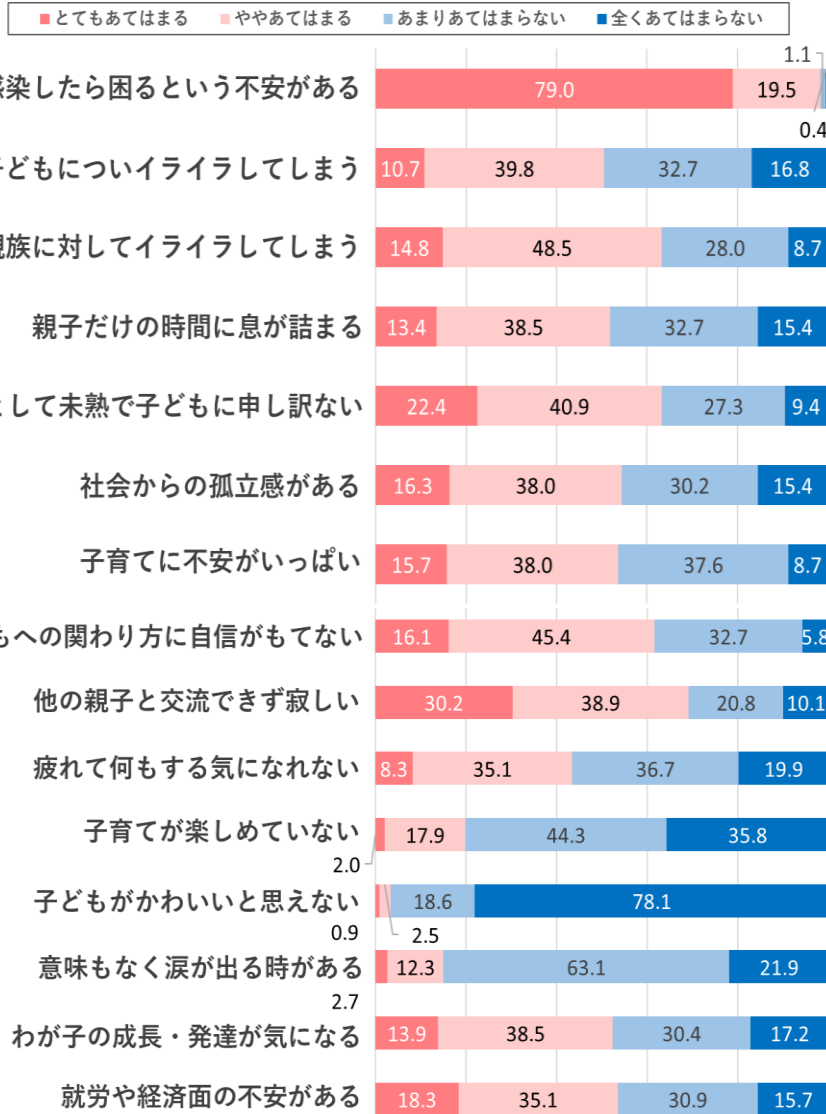
人口密度の高い地域の方が親戚・知人との交流にSNSやオンラインを活用する人が有意に多い
(人口密度別クロス分析)

他者との交流よりも感染リスク回避を優先し、接触の少ない屋外での活動を選択している

8. 調査 I

—兵庫県在住で3歳未満の子どもを育てる保護者 28市町447名—

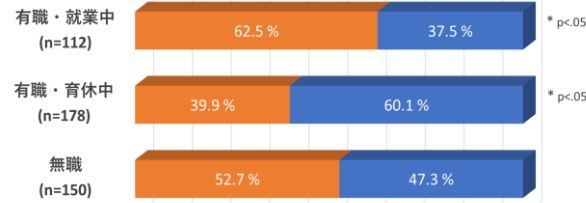
コロナ禍の子育てをどのように感じているか (%) 447名



「子どもについてイライラしてしまう」

$\chi^2=10.703$ df=1 p<.01

とてもあてはまる/ ややあてはまる あまりあてはまらない/ 全くあてはまらない

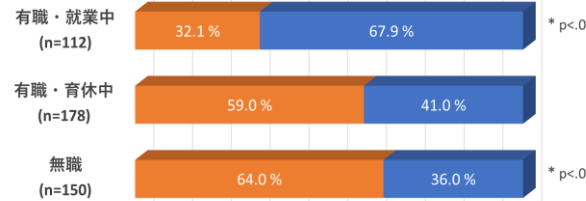


*残差分析(5%水準): 「とても・ややあてはまる」が「有職・育児中」は有意に少なく、「有職・就業中」は有意に多い。「あまり・全くあてはまらない」が「有職・育児中」は有意に多く、「有職・就業中」は有意に少ない

「社会からの孤立感がある」

$\chi^2=29.346$ df=1 p<.01

とてもあてはまる/ ややあてはまる あまりあてはまらない/ 全くあてはまらない

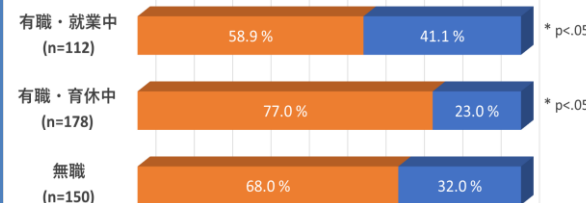


*残差分析(5%水準): 「とても・ややあてはまる」が「無職」は有意に多く、「有職・就業中」は有意に少ない。「あまり・全くあてはまらない」が「無職」は有意に低く、「有職・就業中」は有意に多い

「他の親子と交流できず寂しい」

$\chi^2=10.703$ df=1 p<.01

とてもあてはまる/ ややあてはまる あまりあてはまらない/ 全くあてはまらない



*残差分析(5%水準): 「とても・ややあてはまる」が「有職・育児中」は有意に多く、「有職・就業中」は有意に少ない。「あまり・全くあてはまらない」が「有職・育児中」は有意に低く、「有職・就業中」は有意に多い

コロナ禍における
子育ての実態

地域別クロス分析
では有意差なし

就業別クロス分析
では有意差あり

「孤立感」「交流できない寂しさ」に差が生じる要因として、就業による家族以外の人や社会との接点を有する機会の差が示唆された

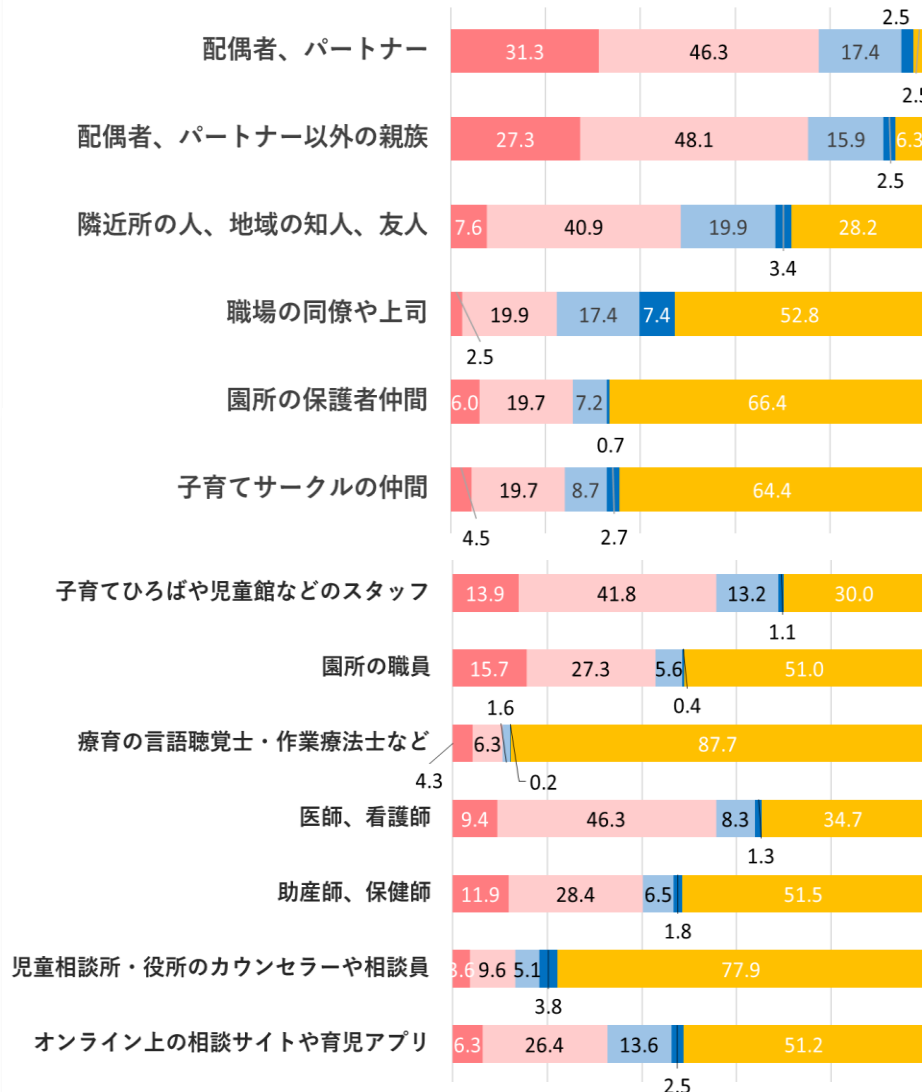
就業中の保護者に対する子育て支援
拡充の必要性

9. 調査 I

一兵庫県在住で3歳未満の子どもを育てる保護者 28市町447名一

子育ての悩みやしんどさに対して頼りになる存在 (%) 447名

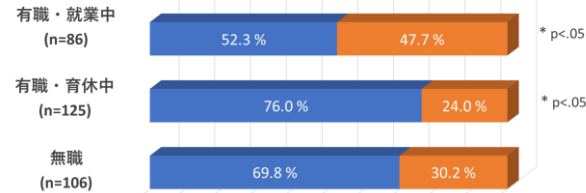
■とても頼りになる ■頼りになる ■あまり頼りにならない ■まったく頼りにならない ■関わりを持てる機会や時間がない



隣近所の人、地域の知人、友人

$\chi^2=13.403$ $df=1$ $p<.01$

■とても頼りになる/頼りになる ■あまり頼りにならない/全く頼りにならない

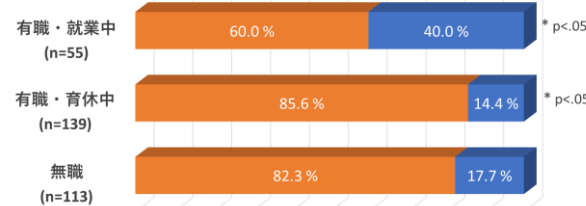


*検定分析(5%水準): 「とても・頼りになる」が「有職・育休中」は有意に多く、「有職・就業者」は有意に少ない。「あまり・全く頼りにならない」が「有職・育休中」は有意に低く、「有職・就業者」は有意に多い

子育て支援施設(子育てひろばや児童館)のスタッフ

$\chi^2=16.730$ $df=1$ $p<.01$

■とても頼りになる/頼りになる ■あまり頼りにならない/全く頼りにならない

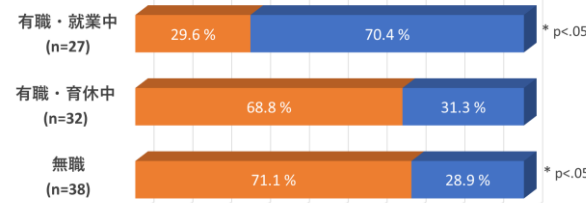


*検定分析(5%水準): 「とても・頼りになる」が「有職・育休中」は有意に多く、「有職・就業者」は有意に少ない。「あまり・全く頼りにならない」が「有職・育休中」は有意に低く、「有職・就業者」は有意に多い

児童相談所や役所の窓口などにある カウンセラー(心理士)や相談員など

$\chi^2=13.403$ $df=1$ $p<.01$

■とても頼りになる/頼りになる ■あまり頼りにならない/全く頼りにならない



*検定分析(5%水準): 「とても・頼りになる」が「無職」は有意に多く、「有職・就業者」は有意に少ない。「あまり・全く頼りにならない」が「無職」は有意に少なく、「有職・就業者」は有意に多い

コロナ禍における
子育ての実態

家族・親族を頼りとする傾向が強い

地域別クロス分析では有意差なし

就業別クロス分析では有意差あり

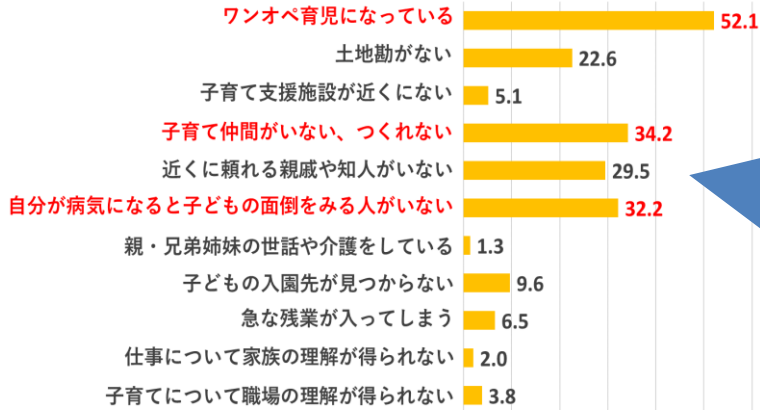
地域のサポート資源に「関わる機会や時間がない」という回答が多くを占める

必要性は定かでないが身近に感じられていない可能性

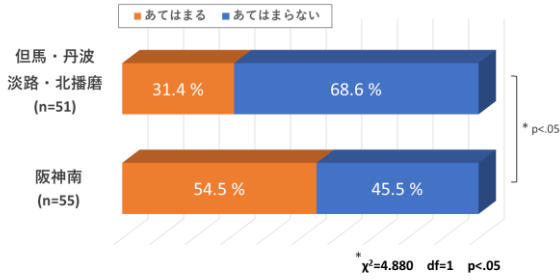
10. 調査 I

一兵庫県在住で3歳未満の子どもを育てる保護者 28市町447名一

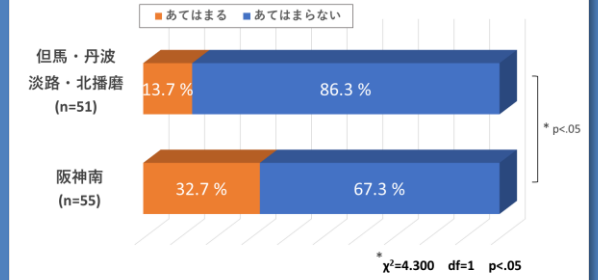
ご自身の子育て環境や仕事との両立について (%) 447名



子育てひろばや児童館など親子が安心して集まれる身近な場や機会を増やしてほしい

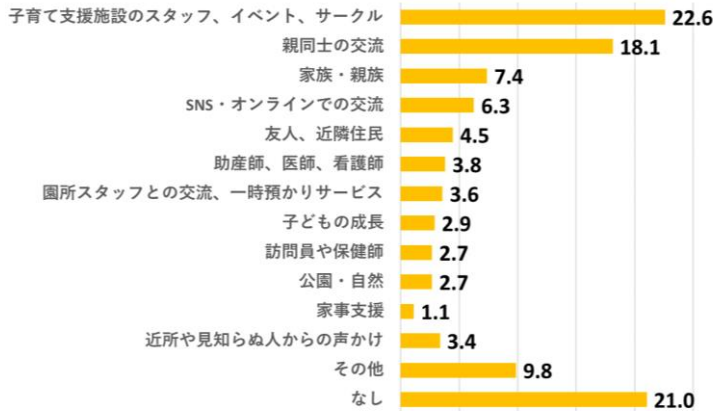


「近くに頼れる親戚や知人がいない」

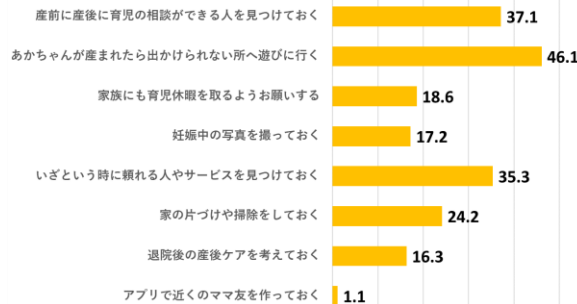


「コロナ禍でも開室してくれていた地域の子育て支援の場には感謝しなかった。感染の恐怖よりも一人で初めての育児に向き合わなければならないことの方がつらかったので、施設スタッフさんや遊びにきていた他の保護者と育児の話ができたことが本当にストレス解消になっていた。」

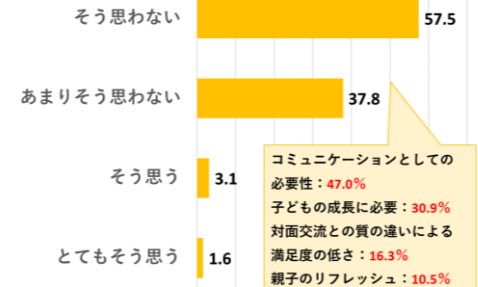
コロナ禍でご自身の子育てを楽にしてくれたり
子育てに前向きになれた出会いや出来事 (%) 447名



これから出産を迎える妊婦さんに最も勧めたいこと2つ (%) 447名



アプリやオンラインの交流が充実すれば
対面できる場や機会は必要なくなると思うか (%) 447名



孤立しやすい環境に対するSOS・選択可能な支援・就業中でも支援に繋がりがしやすい環境・父親が子育てを学ぶ環境の整備

11. まとめ

仮説①

コロナ禍により人との交流が不活化し子育て家庭の孤立が加速度的に進行する

- 3歳未満の保護者を対象としたことでコロナ禍前との比較が難しく、加速度的か否かの検証はできなかった。
- 「親族を頼ることを躊躇う」ような子育て環境が一様に訪れたことにより、感染予防を優先した行動抑制が生じ、コロナ禍前よりも孤立が深まっている実態が明らかとなった。
- 子育て支援事業の縮小により、支援や他の親子との接点も減少した結果、「子育て家庭の孤立」は量的に増大し、「コロナ禍前よりも親子の孤立は進行している」と考えられた。

仮説②

親として育つための支えを得にくい環境で孤立感や子育ての困難が顕在化する

- 「孤立した親の増加」により、「親として未熟で申し訳ない気持ち」「子どもへの関わり方に自信が持てない」など、親としての自分に不安を抱き、子育ての困難感に繋がっている保護者の実態が明らかとなった。
- 就業などにより社会と繋がる機会の差が、孤立感の深さに作用する可能性も示唆された。

仮説③

親のニーズに寄り添う多様なアプローチの支援が必要になる

- 保護者が「関わる機会や時間がない」支援の資源が多く存在することが明らかとなった。保護者にとっての必要性は定かでない反面、保護者自ら積極的にSOSを出して支援に辿り着くことが困難である可能性も排除できない。
- 就業している母親の増加に伴う休日の支援拡充、情報提供の方法、父親に対する支援など、個々の背景から表出する多様なニーズに対し、選択肢の拡充を求める声が自由記述に多く見られた。